

二〇一四年「青年部台湾研修ツアー」

李登輝先生からいただいたお言葉

鹿児島大学文学部四年 山元 勇人

結団式・夕食会

「我不是我的我（私は私でない私）。これは、今回の青年部台湾研修ツアー（八月二十一日～二十四日）で一番印象に残った李登輝先生のお言葉です。

今回は幸運に恵まれ、お元氣な李登輝先生にお会いすることができ、先生が著された「メモント・モリ」という文章の中に、この言葉について『「私は私である」という、『私の生』の側からの生き方ではない、『神から与えられた生』を自覚して、己を尽くして生きる無私の生き方がそこにはある」という説明がありました。

では、李登輝先生との面談から時計の針を少し戻して、初日から今回の研

修を振り返ってみたいと思います。

日本李登輝友の会の活動に初めて参加させてもらうことになった私にとって、他の団員の方との面会は少し緊張した場面でもありましたが、楽しい夕食会の雰囲気でも、徐々に緊張は打ち解けていきました。翌日に李登輝先生への訪問を予定していたので、一人ずつ李登輝先生に聞いてみたいことなどを発表し、話題も広がり、他の団員の方の興味なども分かったので、良かったのではないかと思っています。

占拠の立法院を見学

二日目の午前中、私たち一行は、ひまわり学生運動の中心舞台となった立法院を訪れました。そこで民進党の陳



総統府秘書長や外交部長を歴任された重鎮の陳唐山・立法委員のご紹介で立法院を見学（8月22日）

唐山議員にご挨拶し、立法院紹介の映像を拝見した後、立法院占拠行動のメインとなった「議場」の中も見学しました。もうすでに半年が過ぎようとしています。もうすでに半年が過ぎようとしています。テレビの画面を通してよく見ていた議場の風景に、「ここが現場かあ」と感慨に浸りながら、記憶をたどるように思いを馳せました。

李登輝先生を表敬訪問

昼食後、MRTに乗り、李登輝基金会がある紅樹林へと向かいました。面

会予定時間に近づくほど、緊張感が高まってきました。やがて、その時がやってきました。李登輝先生は参加者一人ひとりの名前を呼びつつ握手してから「座りなさい」と声をかけられ、全員が着席。「何を話そうか迷ったのだけど、『日本と台湾―これまでとこれから』というテーマでお話しします」という前置きの言葉もほどほどに、早速お話が始まります。

お話は二時間以上、話題は多岐にわたりましたが、いくつか特に印象に残



李登輝先生には2時間以上にわたって生と死や指導者の資質などについてお話いただいた（8月22日）

ったことを記します。

まず、生と死についての話題です。古代ローマ時代から言われている「メント・モリ（死を想え）」という言葉の紹介と共に、なぜ死を想って生きなければいけないか、と問われました。なぜなら、それによって「生」の根源的な意味を捉えることができるからという説明でした。また、日本精神の前提に、人間というものは死ぬものである、という考えがあるとおっしゃったときは、思わずハッとしました。

次に指導者能力の修練について、指導者は心の弱さを知るために信仰を持つべきというお話をお聴きしていて、思うところがありました。それは台湾への愛です。そして、台湾のために身を粉にして尽くすという強い意志も感じました。こういった愛や意志は、キリスト教を信じる前からももちろんお持ちになっていたと思いますが、信仰を持つことよってそれがさらに揺るぎのない柱となり、李登輝先生を支えたの

ではないかと思いました。

こういった考え方・生き方を一言で表したものが、冒頭で紹介した「我是不是我」なのだと思います。つまり、「人間は何のために生まれてくるのか、それは自分のためだけではない、公のため、社会に貢献するために生まれてきたのだ」ということです。言葉にするのは簡単ですが、実行するには難しい生き方だと思います。

また、質疑応答の時間にリーダーシップについて質問したところ、「リーダーシップは自分で創り上げていくもの」というお言葉をいただきました。これからこのお言葉を自分に問い続けながら頑張っていくと思います。他にも、国際情勢の変化や安倍総理のリーダーシップ、武士道と日本精神、台湾の政治情勢、日本と台湾の関係についてなど、本場に多くのことを語っていただきました。あつという間に時間は過ぎ、最後に皆さん一緒に記念撮影をし、その場を後にしました。

とにかく濃く豊かな時間で、その日の夕食会は、興奮冷めやらぬまま団員の皆さんといろいろ語り合いました。

台湾人青年と交流・意見交換会

三日目の午前中、台湾大学にて、立法院占拠行動に参加した台湾人学生四名と交流、意見交換をしました。

体験者の目線から語られる立法院占拠行動から、今までニュースやSNSで広まっていたものとは少し違った一面が見えてきました。

突入成功当初、どうやってメンバーを集め、役割分担して組織を作っていたのか。また、立法院内での生活はとてもストレスが大きく、半日過ぎすだけでも辛かったこと、当事者たちの中でも誰が先導したのか分からない混乱を極めた行政院突入、両親からの応援、退去するかどうか大きく議論が分かれたことなど、等身大の話から、苦労と困難の中、それでも行動を続け、市民や国際社会の支持を得て成果に結



ひまわり学生運動で立法院議場を占拠した台湾の学生たちと意見交換（8月23日、台湾大学）

びついたのでなと、改めて学生たちへ尊敬の念を抱きました。

その一方で、当事者である台湾人学生の中から、台湾の学生運動には深い思想がなく、協定や決め方に反対と言っているだけ、という批判の意見が出されたのは興味深かったです。

質疑応答の中で、日本では学生が社会運動をすると就職活動に影響が出ると言われているが、台湾では積極性がある等と捉えられ逆に歓迎されるといふ話は、私が就職活動を控えた現役学

生であるということもあり、関心を持ちました。

また、台湾人学生側から、なぜ日本の学生は社会運動がしづらい状況になっているのかという質問が出て来て、安保闘争の際のテロ事件などが影響しているのではないかと、そこから安保闘争とは何だったのかという解説をするなど、全体を通して充実の意見交換だったのではないかと思います。

蕭錦文さん案内の二二八紀念館

午後からは、二・二八事件についての展示がある二二八紀念館を訪れました。自身も二・二八事件の被害者であり、日本語通訳のガイドをボランティアでされている蕭錦文^{しょうきんぶん}さんが案内をしてくださいました。

蕭さんは、台湾義勇志願兵としてビルマへ派遣され、日本軍人として戦われたという過去もお持ちです。多くの犠牲者を出したインパール作戦から生還し、その後、新聞記者として働いて

いる時に二・二八事件が勃発。「無実の罪で逮捕され、処刑される寸前までいった。だから今、こうして生きていて、皆さんと会えるのがとっても嬉しいんだ」という話にじっと耳を傾けながら、思わず胸が熱くなりました。

蕭さんは「大東亜戦争は仕掛けられた戦争であり、侵略戦争ではなく、防衛のための戦争であった」という観点から話されました。同調できない点もあったのですが、そういった声から何かを感じ取り、もっと思索を深めていきたいという考えから、いまは静かにその思いを受け止めました。

私自身は以前に一度、二二八記念館を訪れたことがあり、今回は二度目の訪問だったのですが、蕭錦文さんの案内で、日本統治下の一九二〇年代に台湾デモクラシー運動が盛んになった背景には、板垣退助が台湾を訪れ、各都市を遊説して回った成果があることを初めて知りました。これには驚き、どうして一度目の訪問では気づかなかっ

たのだろうかと思いましたが、それもそのはずで、民進党政権下では彼の貢献に言及する展示物があつたが、国民党が政権に返り咲いた時にその展示物は撤去されてしまったそうです。

今日までボランティアでガイドを務められ、故意に葬られようとしている歴史を語ってくださっている蕭さんに改めて感謝の気持ちを抱きました。

その日の夜は、台北市内のホテルでの李登輝基金会の募金パーティーにご招待いただきました。台湾の大物政治家も多く出席していて、李登輝先生の政治的影響力が根強く残っていることを肌で感じました。また、迫力さえ感じられる力強いお声での台湾語でのスピーチと、それに聞き入っている聴衆の様子は、見ていて圧巻でした。

最終日と謝辞

最終日四日目の午前中は、台北での自由行動、その後は団員の皆さんと一緒に昼食を取って解散というスケジュール

ールでした。

ふと二日目の李登輝先生との面会について思い出し、ただの大学生である自分にとって、雲の上のような存在の李登輝先生を少人数で訪問し、長時間お話をしてくださった上、私自身の質問にもお答えいただき、本当に貴重な機会であつたことを改めて認識しました。訪問に応じてくださる李先生のお人柄に感謝するとともに、このような活動を活発に展開している日本李登輝友の会にも感謝いたします。

最後に、今回の団長を務められた杉本拓朗・青年部長にも感謝申し上げます。李登輝先生ご来日の件で、訪台中も毎晩遅くまで打ち合わせなどお忙しい中、団長としての役割を果たしていただいたことに加え、持ち前の知識で戦後日本の歴史を語り、食事の場では冗談を言って和気あいいとした雰囲気を作っていたいただきました。背中に日本精神を見た、そんな氣もしました。ありがとうございます。